

離 散

—45年前の企業合理化についての断片的思い出—

和歌山県・フクスケ労組OB・渡部 日出男

“労働組合の力なんて、これが限界なんだなー”

私たち組合員200名ほどは皆そうした思いで唇を噛み涙をながした。

口先では頼もしいことを言っていたが、まったくの詭弁だったんだと、職場の隅々から悲痛の声があがり、組合に対する不信の声が怒号に変わり、まるで修羅場のような毎が続いた。

いま、当時のことを断片的に思い出してみても、あの暗澹たる一年近くの日々は、まるで煉獄の世界（キリスト教の用語）をさまよっているような、苦しくも、なんとも切ない毎日であった。

労働組合の本部は大阪府堺市にあり、そこに会社の本社があり、そこだけでも当時は3000人ほどの従業員が働いていた。

私たちが働いていた工場は秋田県横手市にある分工場で東北工場と呼ばれていた。

賃金も当時は地域給制度というものがあり、本社の従業員と比較すると格段の差があったが、それでも仲間たちは組合に一縷の望みを託し、歯を食いしばって働いていた。私たちの分工場で作っていた製品は「地下足袋」で、いまでこそ忘れ去られてしまったかのような商品だが、戦後のあの頃は貴重品ともいえる品で、闇市でこっそり高値で取引されているとも言われていた。

時代の移り変わりの中で、そうした地下足袋の需要が激減すると、会社は工場の稼働を停止して、土地や建物を処分し、従業員全員を大阪を拠点として各支店や営業所に配置転換をしたいと提案してきたのだった。

合理化と仲間の苦悩

この工場閉鎖の提案が組合本部を通じて正式に出されたのは昭和27年1月の初めであった。当時、私は分工場における組合の責任者だったので、こうした会社提案はすぐ撤回するようにと反論したことは当然のことだったが、本部役員の中には会社の提案は止むを得ないとする考えと、私の撤回要求を支持する意見とに分かれた。しかし、次第に会社の提案に傾いていくような雰囲気を感じて、どうしたことかと、私は一人懊悩（おうのう）を繰り返していた。

秋田県の横手市という、当時4万人弱の小都市に生まれ育って、この工場でも働いて生計を立てていた私たちは、大阪へは一度も行ったことがないという人がほとんどで、ましてや生き馬の目を抜くとまで比喻される大阪などへ生活の拠点を移すことなど、とても考えられないことだった。

妻や子や年老いた親を連れて、まる一昼夜も汽車に揺られて行く大阪なんぞへどうして行けるのか。また、主人や子供を郷里に残して単身で大阪へ出て働くなんて主婦の従業員にとっては、とても考えられないことであった。言葉の違いや生活習慣の違いなどは、ある程度時間が解決してくれるかも知れないが、先祖代々の墓守を誰がやってくれるのか、といった苦情や、夫婦の別居生活や離婚の話まで持ち上がり、これからどうして生きてゆけばいいのか、仲間たちは、みな焦燥に駆られた気持ちで苦悩の日々を過ごした。

“組合はどうした。こんな時こそ働く者を助けてくれる筈じゃなかったのか。”

仲間たちの間に疑心暗鬼と相互不信の嵐が吹き荒れた。

横手と大阪、何度も往復で話し合い

組合本部は、従業員の完全雇用は確保すると言い続けたが、それは大阪本社やその他の事業所への配置転換による雇用の確保だと知ると、もう労働組合としての機能は完全に麻痺した感じがして、誰も信用しなくなってしまった。こうした混乱と動揺の日々の中で、なんとか解決の方法が見出せないものかと、私は数回、横手と大阪を往復し、話し合いの機会を積み重ねていた。

そんな夏のある日、大阪からの帰路、東京に途中下車してゼンセン会館に疲れた足を運んだ。その日は日曜日で会館の業務は休みであったが、のちに参議院議員になられた当時のゼンセン同盟の会計をしておられた瓜生清さんが待っていてくれたので、事の仔細を説明し仲間たちの救済をお願いしたことがあった。

瓜生さんは沈痛な表情で話を聞いてくれたが、「どうにかありませんか。何か採算ベースに乗るような製品の新規開拓はできませんか?」と言ってしばらく沈黙が続いた。何本も続けざまにタバコを吸い、灰皿がすぐに吸殻の山になった。後日の再会を約して、数時間後会館を去り、私は再び車上の人となり、揺れる列車の中でコップ酒をあおり続け悶々としていた。

ゼンセン本部からは役員が何人も来られ、日夜、対策を検討したが、これといった進展は得られなかった。会社は、打ち出した提案は撤回できないというし、組合は執拗に反論を続けていたが、議論はいつも平行線をたどり、空論ばかりが堂々巡りしていた。

工場閉鎖に対する市民や市議会の反対の声も当然あったが、具体的な代案もないまま、いつしか立ち消えていった。

あとに残ったものは、ゼンセン同盟や当該組合への批判ばかりであった。そして、労働組合の力量って所詮はこんなものだ、という諦めだけが残った。

配置転換そして東北支部解散

私たち仲間の組合員は、20名が大阪へ、8名が東京へ、5名が仙台へ、その他新潟や他の営業所へと居住地を変え、移り住むことになった。

年老いた親の手を引いて、住み慣れた横手の広々とした住居から、大阪の狭い社員住宅へと移り住んだ仲間、親の面倒を親戚に頼んで夫婦と子供とで転宅に応じた仲間、別居生活を余儀なくされた仲間、そしてその他の多勢の仲間たちは怒号渦巻く中で号泣しながら、みな散り散りに離散して行ってしまった。

やっとの思いで大阪へとやって来たが、生活環境に溶け込むことができず、家人の留守中に命を絶ってしまったお年寄りの方もいて、配置転換の悲惨な現実を見せつけられたこともあった。

私は、当時、5歳になった長男と生後2ヵ月の長女を連れ、妻とともに大阪の土を踏んだ。ささやかな人生設計や希望など無惨に断ち切られ、見知らぬ土地に投げ出された仲間たちや、泣く泣く職場を去って行った多くの仲間たち、その後の移住地で帰らぬ人となった数人の仲間たち。いま、あの混迷の一時期をどうにかくぐり抜けてきた仲間たちの面影を追いながら、大阪と郷里を結ぶ糸が次第に痩せ細くなりつつあるのを寂しく思っている。そして、ボロボロになっている当時のメモ帳を見て、東北支部という組合の組織は、昭和37年9月30日に解散したことを改めて認識した。もう45年も昔の出来事である。

同時に思い出すのは、私は大阪本社に勤務していたのだが、数年を経たある日、組合の専従役員になるよう要請され、内心、忸怩たる気持ちがあったが結果は役員の末席を汚すことになってしまった。

先駆者から多くの薫陶

幸いにしてその後、ゼンセン同盟の文化運動を通じて、いまは故人になられた方々で、滝田実元会長や、山田精吾さん、藤井恒雄さん、柄谷道一さん、瓜生清さん、竹内文義さんといった労働運動の先駆者の方々とお近づきになり、数多くの薫陶を戴くことのできたことを心から感謝している。その中でも滝田さんから頂戴した親書は私の部屋の書架にあって、ともすれば怠惰を貪る私を絶えず叱咤してくれている。

時折、大阪に在住している仲間たちと歓談することがあって、当時を偲び、思い出話に花を咲かせるが、こうした人生の境遇もひとつの運命だったのかも、諦めているようだが、あのような悪夢は二度と起こらないようにと願うばかりである。

しかし、自分の知らなかった土地に移り住んで、そこの住民となり、多くの人々と知り合い、その地に骨を埋めるということも、ある意味では自分の社会的視野が広くなり、何かしら学んでいるのだと思うと、それでいいのではないかと思えなくもない。

おわりに

現役時代は、労働運動は崇高な活動だと青臭い理論を振り回したこともあったが、しかし、その考え方の片鱗は、いまでも私の頭を離れないでいる。

苦しいときは助け合い、励ましあい、慰めあってこそ血の通う運動となって、たくましく結実するのだと、いまでも頑なに思っている。

現在、かつての終身雇用といった形態は崩れだしているというが、雇用の形態が変わるということは、個人としての経済活動も自ずと変化するということでもあろうか。

いま、バイトやフリーターといった不安定な雇用形態の中で、多くの人々は生活の糧を求めて右往左往しているように思えてならない。労働運動の指導者や活動家の方は、こうした社会の現状をどのような視点でとらえ、働く人々が少しでも安定した生活を作り出すには、どのような社会の仕組みにすべきかを、さらに追求する必要があるのではなかろうかとの愚問をいつも抱いている。

その国の盛衰は、その国の労働者の在り方によって大きく左右されるという。

労働運動のさらなる前進を心から期待しております。

45年前の、あの苦しい体験が再来しないことを祈りつつ。

以 上